

# 場所をあらわす名詞の意味相

高木南欧子

## 一・場所をあらわす名詞

会社、駅、など場所をあらわす名詞は場所名詞と呼ばれる<sup>(1)</sup>。しかし、「会社へ行く」「駅へいく」などは「横浜へ行く」のように、「行く」という動詞とともに使われた場合、移動先での活動目的が異なっているように思われる。さらに、場所をあらわす名詞が、固有名詞である場合、移動先での活動目的が示される場合と示されない場合がある。

本稿では、Pustejovsky (1995) の生成語彙論における“Qualia Structure” (クオリア構造と訳されることもある) の枠組みを利用して、場所をあらわす名詞がどのような意味構造を持つのかを分析し、移動先での活動目的に関わる意味解釈への影響を考える。その際、普通名詞については、国語辞書の意味記述を意味分析の出発点とする。

## 二・場所をあらわす名詞とクオリア役割

名詞が持つ意味の構造を分析するにあたり、Pustejovsky (1995) が提唱する4つの意味相“Qualia Structure”の考え方が、複数の視点による意味記述が可能になるという点で有効であると考える(2)。Pustejovsky (1995) は、語の意味が、4つのクオリア役割からなる意味相によって規定されるとしている。この意味相“Qualia Structure”の枠組み(3)を、国広(2002b)は、次のように紹介している(4)。

### (一) 意味相“Qualia Structure”

- 一 構成相 (CONSTITUTIVE): The relation between an object and its constituent parts. (物とその構成部分との関係)
- 二 形態相 (FORMAL): That which distinguishes it within a larger domain. (大きな領域の中でその物を他と区別する特徴)
- 三 目的相 (TELIC): Purpose and function of the object. (物の目的・機能)
- 四 生成相 (AGENTIVE): Factors involved in the origin or “bringing it about” of an object. (物の起源あるいはその産出にかかわる要素)

これに従うと、例えば「ケーキ」は、まとまったかたまりのある物質(構成相 CONSTITUTIVE)であり、食べ

物(形態相 FORMAL)で、誰かがそれを食べる(目的相 FELIC)ものであり、誰かがそれを焼く(生成相 AGENTIVE)という意味相を備えているという。そこで、(1)に示された意味相の構造にしたがって、「ケーキ」のクオリア役割を示すと、日本語では次のようになる。

(二)「ケーキ」の意味相

構成相 (CONSTITUTIVE) : かたまりのある物質

形態相 (FORMAL) : 食<sub>へ</sub>物

目的相 (FELIC) : 誰かが物質(ケーキ)を食べる

生成相 (AGENTIVE) : 誰かが物質(ケーキ)を焼く

以下では、「場所名詞」へ「行く」という場合、移動先での目的が示されるか否か、また、場所をあらわす名詞の意味相はどのような構造になっているか、そして、その構造と移動先での目的が示されることとの関係性について考える。

二・一 固有名詞

名詞は大きく、固有名詞と普通名詞に分けられる。まず、場所をあらわらす名詞のうち、固有名詞について考える。

(三) a. 横浜へ行く。

b. 東京へ行く。

「横浜」は、あるかたまった場所として認識されるが、有限の形をそなえた形状を持たず、特定の目的も持たず、生成の起源が何によってなのか特定することはできない。地図上の境界線があることはあるが、多くの人は、横浜を地図の形をもって認識することはない。かつて漁村が点在していた村を、政府の方針で港町にした経緯があるが、しかしすべての人が同じ目的を持って町の形成に参加したわけではなく、また、横浜の場所すべてが港のために設計されたわけでもない<sup>(5)</sup>。そのため、「横浜」の意味相は次のようになると言えるだろう。

(四) 「横浜」の意味相

構成相 (CONSTITUTIVE) : 場所の集合体

形態相 (FORMAL) : 町

目的相 (TELIC) : [ ]

生成相 (AGENTIVE) : 不特定多数の人と建物が集まる

「横浜」は、目的相が空白であると考えられるため、(三a)では、「横浜」は目的地としての場所だけを示すのがデフォールトな状態で、目的地での活動目的はあらわされない。単純に移動することのみで(三a)の目的は達成

される。そこで買い物をするか、観光をするかは人さまざまであり、移動地での目的は文の成立には関わらない。

しかし、(三b)の東京は、場所の固有名詞であるが、同時に日本の首都と広く認識されており、その役目を果たすように一部に手が加えられており、多くの機能が集中している。そのため(三b)は、単に「東京へ移動する」という意味で使われるだけでなく、「何かの目的のために(生活の場所を)東京に移動する」という意味でも使われることがある。後者の意味の場合、文が含む目的は、移動だけでなく、首都圏で生活をするということまで含まれることがある。この違いは何によっておこるのか。「東京」の意味相を考えてみる。

#### (五)「東京」の意味相

構成相 (CONSTITUTIVE) : 首都としての機能を担う都市

形態相 (FORMAL) : 街

目的相 (TELIC) : [ ]

生成相 (AGENTIVE) : 多数の人と機能が意図的または自然に集まる

「東京」の意味相においても、目的相は空白である。しかし、東京に移住するという意味に解釈される場合、目的相に何らかの目的、例えば「東京の大学に進学する」、「歌手になる」など、文脈や状況によって、「東京」が特別の目的を達成するために必要な要素を備えていることが前提となる。首都は、政治、経済、文化の中心であるはずだと一般には考えられている。そのため、構成相や生成相の意味に、首都であることによりもたらされる特徴が

反映し、そこから特定の目的が類推されるのだと考えられる。

限られた場面において、場所の固有名詞が一般では使われ方をしない例は他にもある。家族などの間で、所在地の名称を、家の名称の代わりに用いる場合などである。例えば「扇島」という土地に実家がある場合、「扇島へ行く」という文は「帰省する」という意味に解釈される。このような場合も場所をあらわす名詞の目的相は空白であると考えられるが、構成相や生成相によって、その土地に親族がいるなどといったことが示されるのだと考えられる。この用法は、本社が東京にあり、支店や支社が札幌にあるという場合、「札幌へ行く」という発話は、札幌への移動、および移動先で仕事をするという活動目的を示す、などといった例が他にも考えられるだろう。

## 二・二 地形名詞

次に普通名詞であるが、普通名詞の意味相を考えていくにあたり、まずいくつかの中型辞典の記述を参照し、そこを出発点として、それぞれの意味相を考えていくこととする。まず、海、山、川などといった地形名詞について考えると、横浜の例と同様に目的相は空白であると考えられる。例として「川」についての記述をみてみよう。

### (六) かわ【川】

『岩波 国語辞典』

自然の水がだんだんに集まり、陸地のくぼんだ所を流れる（帯のような）水路。一般に、山から発して海に注ぐ。

『学研現代新国語辞典』

地表の水が集まって、くぼ地にそって流れてゆくもの。

『新明解 国語辞典』 地上のくぼんだ所へ集まって、自然に流れ、海、湖などに注ぐ水（の道）。

『新選国語辞典』 地表の水が、陸地のくぼんだ所を流れくだる水路。

生成相、形態相にかかわる記述はすべての辞書にみられるようである。しかし、構成相にかかわるものは『岩波国語辞典』の「（帯のような）」の部分と『三省堂新明解』の「（の道）」の部分にみられるのみであり、双方とも（ ）で括られている。「水路」という記述もあるが、水路は、人工的に手が加わられているものも含まれるので、川全般に対する説明には適さないと考えられる。目的相にかかわるものに関しては、すべてにおいて記述がみられいため、やはりここは空白であると考えられる。「川」の意味相を考えると次のようになる。

(七) 「川」の意味相

構成相 (CONSTITUTIVE) : 長いくぼ地を流れている水

形態相 (FORMAL) : 水の集合体

目的相 (TELIC) : 「 」

生成相 (AGENTIVE) : 地上の高いところから低いところへ水が流れる

目的相は空白なので、「川へ行く」では、移動先での目的が特に明示されることはない。これら自然に形成された場所は、人によってさまざまな利用のされ方が想定される。例えば「川へ行く」だけでは、川へ洗濯に行くのか、

バーベキューをしに行くのか、カヌーに乗りに行くのか、その目的をただちに判定することは不可能である。もし判定するとなると、強い制限のある文脈が必要になる。そして限定された文脈が、意味相の一部に焦点をあてることにより、目的が想起される可能性はある。例えば、発話者の発話前の会話や服装、持ちものなどの状況などによって、洗濯が連想されれば「流れる」「水」、バーベキューであれば「くぼ地」と「水」、カヌーであれば「高低差」のある「水」の「流れ」というように、特定の活動目的を、目的相以外のクオリア役割が支えることは考えられる。川が「多摩川」などのように固有名詞である場合は、構成相に「整備された河川敷、土手」といったことまで含まれるため、「東京」の場合と同じように、構成相がある特定の活動を想起させることもあるだろう。

発話時の時期も、影響を与える可能性がある。特定の季節の行楽と強く結びついている場合、発話がなされた季節によっては、目的相の意味が積極的に喚起されるということはあるだろう。例えば、「海へ行く」という発話が暑い盛りの夏にされた場合は、行楽でないことの方が少ないと考えられる。

## 二・三 いわゆる場所名詞

先にふれたように、場所名詞に「行く」が組み込まれた場合、その場所における活動目的は、固有名詞や地形名詞とは違いがみうけられる。「会社」の場合は、「会社へ行く」は、移動先で仕事をする事まで含意すると考えられる。「会社」の意味記述は、先に見た中型辞典では、どの記述もほぼ同様である。ここでは、他の辞書の意味記述をすべて含んでいると思われる『新明解国語辞典』をあげる。



## (八) かいしゃ【会社】

営利事業を共同の目的として作った社団法人。

「会社」を「社団法人」と説明しているのは、先にあげたすべての辞典でなされていたが、社団法人とは普通、設立に官庁の認可を必要とする公益法人をさすものであるが、実際「会社」はこの要件を満たさずとも設立することができるため、この意味記述は現実とずれがある。また、生成相、形態相、目的相は、説明からうかがうことができるが、構成相に関する記述はみつからない。会社は人工物であり、実際の建物や部屋の一室など、物理的に存在するものをさす場合もあると考えられる。そこで、構成相を補って考えると、次のようにあらわすことができるだろう。

## (九) 「会社」の意味相

構成相 (CONSTITUTIVE) : 複合体 (資本・組織・場所)

形態相 (FORMAL) : 団体

目的相 (TELIC) : 営利を業とする

生成相 (AGENTIVE) : 誰かが組織を作る

「会社」がすでにみてきた名詞と大きく違うのは、目的相に意味特徴が示されているということである。そのた

め、「会社へ行く」といった場合は、意味するものは移動だけではなく、目的地での活動、そこで仕事をするという意味解釈が自然にされる。

次に「駅」をみるが、こちらもどの辞典でもほぼ同じような記述がされているため、最も簡潔にまとまった記述をされていると思われる『新明解国語辞典』の説明をみる。

(一〇) えき **【駅】**

汽車・電車などが発着し、客の乗り降りや貨物の積みおろしなどを扱う施設。

「駅」は場所名詞であるにもかかわらずに「会社」と同様に構成相にかかわるものの記述がみられないので、そこを補って意味相を考える。

(一一) 「駅」の意味相

構成相 (CONSTITUTIVE) : 複合体 (改札・ホーム・発着電車)

形態相 (FORMAL) : 施設

目的相 (TELIC) : 移動する

生成相 (AGENTIVE) : 組織が運営する

「会社へ行く」と違い、「駅へ行く」といった場合、鉄道会社の職員など駅で働く人以外、「駅」にとどまって何かをするとは考えにくい。説明の記述にもあるように、「駅」は通過点である。そのため、誰かを迎えにいくために駅に行くことはあっても、駅に行つてそこで何か活動をするということはない。また、駅は乗り物にのるための出入り口であるため、多くの場合は駅からさらに先にあるどこかが移動先であるはずであると考えられる。例えば「駅に行くにはどう行けばよいですか」と尋ねる場合も、とりあえずの目的地は駅だけでも、そこから電車にのつたり、またはバスにのつたり、歩いたりした先が本当の目的地なのである。「駅に行く」において移動先であるはずの「駅」が真の移動先として認められないのは、目的相によってそれ自身が「移動」の意味を特徴づけられているからだと思われる。そのため、「駅へ行く」は、真の目的地Aへ移動するため、今の目的地B（駅）へ移動する、ということになる。真の目的地Aが今の目的地B（駅）の裏に隠れているという認識がある点で、固有名詞や地形名詞の場合とは異なる。

このような「会社」「駅」などといった場所名詞は、生成の過程が人為的なもので、何かの目的をもって設計されてできあがったものである。そのため、目的相は、その施設を利用する人のための利便性を備えたものになっている点で、他の場所をあらわす名詞とは大きく異なっている。また、特定の目的をもって作り上げられたものであるから、意味相の4つのクオリア役割の意味特徴は、その場所が人に提供するアフォーダンスをより明確に示していると考えられ、それが意味解釈に影響を与えているのだと思われる。

## 三・認知焦点

Pustejovsky (1995: 231) は、次のような例文をあげ、名詞の目的による意味解釈についてふれている。

- (11) a. The student is at the board.  
 b. John is at his desk.  
 c. John is at the office.

これらの文において、特定の目的をもった場所、つまり、何かを書くための *the board*、仕事をするための *desk* などの名詞の前に、前置詞 *is* が置かれており、さらに *John* は、その前置詞句から導かれる活動、黒板なら何かを書く、机なら机から連想される何かの作業といったものに従事していることになる、としている。

先にみてきたいいわゆる場所名詞や、東京のように強い文脈を作りうる固有名詞などの場合、「場所」へ「行く」の構文が単に移動だけを示すのではなく、場所をあらわす名詞の目的相や、他の相が意味を支えることによって、文の表面上の意味だけではなく、移動先の活動目的までを含蓄する現象と似ているように思われる。

国広 (2002b: 165-166) は、意味相における「認知焦点の移動」を指摘している。クオリア役割でいえば、ある部分—形態相や目的相などの一部分に焦点が絞られることによって多義が発生することがあるという。例えば、「学校」「銀行」などは、場合によりその一部分に焦点が合わされて用いられるが、つねにほかのすべての部分が裏

で支えているという。このような考え方からすると、(一二)の例や本稿でみた場所名詞などの場合、目的相に焦点があてられた結果、活動までが含意されることになったといえるのではないだろうか。

Pustejovsky (1995: 231) は、*yo* に次のような例文をあげている。

(一二) a *Zac is in school from 9:00 am to 3:00 pm.*

b *Mary is in hospital with a broken leg.*

Ⓜ が導く名詞 *school* や *hospital* は多義である。そのため、名詞の目的相の特徴によって、*Zac* や *Mary* の所在地が示されるだけでなく、「入院中である」、「勉強している」といった活動、および「患者である」、「生徒である」ということまでが示されるとしている。これらの意味解釈は、意味相のほぼ全体がかかっていると考えられるだろう。

本稿でみてきた例文の場合に、多義が発生する理由として、場所をあらわす名詞の意味相だけでなく、さらに「行く」という動詞の特性を考える必要があると思われる。「行く」は非能格自動詞であるから、意図的な移動動詞として用いられた場合の「行く」は、単純に移動先だけを要求する場合と、さらに移動先での活動目的までを要求するという、2つの項を要求すると仮定できる。そのため、目的相が空白の場合は、特に移動先での目的は明示する必要がなくなるが、目的相になんらかの意味特徴が存在する場合、または文脈上存在する必要がある場合は、移動先での活動が明示されると考えられる。

以上、場所をあらわす名詞について、意味相の視点から、「行く」とともに使われた場合の移動先と移動先での活動についての違いをいくつかの用例からみてきた。しかしながら、今回、分析の視点のひとつに、取り入れることができなかった部分もある。意味相を項にわけて考えていくと、どうしても時間の流れを記述する必要が生じるように思えるのである。例えば、「川」は常に水が流れている状態であるのに対し、「海」は水がたまった状態である。また、「駅」はとどまる時間が極めて短く点的であるのに対し、「会社」はある一定時間、建物の中にあることが考えられる。Pustejovsky (1995) は、動名詞、動詞から派生した名詞 (examination など) の意味相を process, state, event などであらわしている。これらのアスペクト的な要素をどこまで名詞の意味相に取り入れるかは、なお議論の余地が残されていると考える。

## 注

(1) 場所名詞の認定については、寺村 (1968)、田窪 (1984) に分析があるが、一般には「行く」とともに使われた場合、場所名詞「トコロ」がつかずに文が成立するものとされている。本稿では、クオリア役割の構成相によって場所性が示される名詞を場所をあらわす名詞と呼ぶこととする。多義をもつ名詞の場合、場所名詞として使用される場合とそうでない場合があり、議論をすすめていく上での混同をさけるためである。

(2) Pustejovsky の意味相 "Qualia Structure" を用いた日本語の意味分析は影山 (1999, 2001, 2002)、松村・板東 (2005)、吉村 (2001)、国広 (2002a) (2002b) などで行われている。

(3) Pustejovsky (1995) は、すべての品詞にクオリア構造を認めており、語にすべての相がそなわっているわけではないと述べている。(1995: 76) の生成語彙論は、今後さらに発展する可能性もある。本稿では、名詞のクオリア役割 "Qualia role" の名詞の分析の部分のみを参考にして考察を行う。

(4) ひつじ書房国広 (2002a) が「相」とする“Qualia Structure”の4種類の分類 (Qualia role) は「クオリア役割」と訳されることもある。  
 (5) 「横浜」という語から、港町、おしゃれな町、流行のデートスポットが話題にのぼるエリア、などの意味を人によっては含める可能性があるが、それは連想による意味と考え、ここでは考慮にはいれない。

本稿を執筆するにあたり、助言やコメントをいただいた国広哲弥先生には、心より感謝申し上げます。当然のことながら、思い違い、間違いなどがあった場合も含め、本稿の内容は筆者一人の責任に帰することは言うまでもない。

## 参考文献

- 影山太郎 (一九九六) 「日英語対照研究シリーズ5 動詞意味論」くろしお出版  
 影山太郎 (二〇〇二) 「動作主名詞における語彙と統語の境界」『国語学』五三巻一号 四四―五五  
 影山太郎 (二〇〇五) 「辞書的知識と語用論的知識 ―語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて―」『レキシコンフォーラム No.1』ひつじ書房  
 国広哲弥 (二〇〇二a) 「類義語・対義語の構造」『現代日本語講座 第四巻 語彙』明治書院  
 国広哲弥 (二〇〇二b) 「語義の構造」『朝倉日本語講座 第四巻 語彙・意味』朝倉書店  
 田窪行則 (一九八四) 「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』第一二二号、大阪外大留学生別科  
 寺村秀夫 (一九六八) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』一二二号 (寺村秀夫論文集日本語文法編) (一九九二) 収録 くろしお出版  
 松村宏美・坂東美智子 (二〇〇五) 「他動詞「しめる」の多義派生とレキシコン」『レキシコンフォーラム No.1』ひつじ書房  
 吉村公宏 (二〇〇二) 「人工物主語―クオリア知識と中間表現―」『認知言語学論考 No.1』ひつじ書房

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.

## 参考国語辞書

- 『岩波国語辞典』(第六版) 岩波書店 二〇〇〇
- 『学研現代新国語辞典』(第六版) 三省堂 二〇〇五
- 『新明解国語辞典』(改訂第三版) 学習研究社 二〇〇二
- 『新選国語辞典』(第八版・ワイド版横組版) 小学館 二〇〇二